

日本がん疫学研究会

新しいがん疫学・予防戦略に向けて

日本がん疫学研究会代表幹事 田島和雄

皆様、新世紀を迎え、まずはおめでとうございます。ウイルヘルム・レントゲンが第一回ノーベル物理学賞を受賞したのが1901年、この100年間の人智による技術革新は医学分野に大きな進展をもたらせました。昨年からは日本のがん疫学は一大分岐点に差し掛かろうとしております。文部科学省科学研究費特定領域研究として「がんの疫学研究」領域が立ち上がったのです。それは日本のがん疫学研究者の重要性が認識されたと同時に、日本の疫学研究者の能力が試される時でもあります。ヒトの生き様の観察を主流とする疫学研究は、一定の成果を上げるには綿密な研究デザインのもと、莫大な時間を掛けなければなりません。また、疫学研究による調査・解析から得られる情報は統計学的変動による不確実性を否めません。このような多くのハンディを背負いながら基礎研究と肩を並べてどこまで頑張れるか、まさにその点が疫学研究者の力の見せ所でもあります。文部科学省はミレニアム計画として若手研究者の育成と彼らの研究活動の奨励を強調しております。若い疫学研究者の意欲的な試みとパワーに大いなる期待がかかっております。

20世紀後半は大量生産技術の急速な進展に伴い、莫大な消費を謳歌した時代でありました。その負の遺産として新世紀は地球の生物を脅かす環境（特に海洋）汚染に直面しております。地球に生物が誕生して以来、初めて直面する地球生態系の危機に対し、人類が真の知恵を問われる時代が到来します。化石エネルギーから太陽エネルギーへの転換、生物資源の効率的リサイクル、グローバルイゼーションに伴うアンバランスな地球社会環境の調整、各民族の有する特異的な自然環境と社会環境のハーモナイゼーション、など根本的課題は限りなく上げられております。さらに地球レベルで消費抑制を如何に図るか、これは地球の生物を守るために重要な課題となりましょう。今や世界の最先端を走っている自然科学分野の多くの研究は、地球環境保全に対する大きな期待を背負っております。一方では、情報社会を左右するIT革命は5年先も予測できないスピードで進んでおり、新世紀における全地球規模の情報ネットワークは私たちの日常生活の常識をはるかに凌駕してしまう可能性があり、今からその進展に対して脅威を感じております。

新世紀の医科学分野はポストゲノム時代への多面的対応に多くの智慧が注がれることでしょう。がん疫学研究者は、一見すると時代錯誤的と思われるようなペースで、人間集団の生き様を観察しながら、がんの危険・防御要因の探索とがん予防を目指した根強い研究を続けております。それでも、移民の疫学研究により人間は棲息条件の差によってがんに罹る危険度が変貌すること。一方では、がんの危険度は遺伝的に支配されている宿主特性の異なる民族間や個人間で差のあることがわかりました。人類が常に工夫を重ねてきた生活文化の発達は、時としてがんの危険度を高めるような負の働きを示すこともわかりました。そして、がんの新しい疫学・予防戦略を考えていくためには、人間集団をあらゆる側面から検討していく必要があることも理解できるようになりました。ポストゲノム時代においては、がんの宿主要因と環境要因の交互作用に関する研究を避けて通ることはできません。しかしながら、がんの流行と戦う疫学・予防研究の究極的課題は人間を取り巻く自然的、社会的環境と共存していく智慧を示唆するものであり、それはヒトゲノムの域を越えた悠久の原則のように思われます。新しいがん疫学・予防研究の手掛かりもそのような視点から見つかるのではないかと思われます。

「予防に優る治療はない」は2000年以上前にヒポクラテスの時代からすでに概念として存在していました。古くて新しいこの言葉を新世紀には「予防に優る省エネ医療はない」と置き換えてみましょう。特に地球人口の3/4を占める開発途上国に住む人々のがん対策を慮るに、この言葉の意味するところは重要であります。日本は環太平洋、あるいはアジア太平洋地域に位置していますが、明治維新後の100年余りは欧米の環大西洋文化（コンコルド文化）を取り入れながら急速に発展してきました。新世紀は環大西洋と環太平洋の環境差をはっきり認識し、環太平洋文化圏においてがんと共に共存していく方法、つまり類似環境を共有するアジア太平洋諸国の人々が相互協力しながらがんを戦うため、独自の疫学研究を発展させる必要があります。私たちは、従来通り欧米から学ぶべき智慧を常に取り入れ、環太平洋地域におけるがん予防のための情報構築に努めなければ成りません。そのような観点からも日本におけるがんの疫学・予防研究が今後ますます重要になることを強調したいのです。私たちは個人の尊厳性と人権を重視し、一方では公益性を追求する疫学・予防研究の発展を目指し、今や全エネルギーを惜しまず疫学研究に費やすべきであります。

がん疫学研究会の発展を願って

九州大学名誉教授 廣畑 富雄

原稿のご依頼を受けたのを良い機会に、日ごろ思っていることを、“がん疫学研究会の発展を願って”と題して書いてみたい。また長い間私の怠慢で、News Castにご無沙汰したことをお詫びしたい。

がん疫学研究会と社会

がんの疫学の社会的貢献度は、人によって評価は異なるであろうが、私は決して小さいものではないと思っている。ご承知のように、米国では喫煙関連のがんが減少してきているし、ヨーロッパでも同様である。ことに若い世代の減少は著しいものがある。喫煙とがんの解明に、疫学の貢献が最も大きかったのは誰しも認めることであろう。しかし残念ながら、少なくとも日本では、その認知度は必ずしも高くない。ひとつには、疫学のような実用主義的なアプローチは、日本の風土に必ずしもなじまないのであろう。疫学がアングロサクソン系の国々で、より高い評価を受けるのは当然かもしれない。

しかし考えるべきこともあるように思われる。疫学は実学であり、社会と大きな接点を持つ。その意味で、社会にきちんとした形で情報提供をする、あるいは社会に働きかける必要があるように思われる。とてもテレビのコマーシャルを買うような力はないが、より学会にまた社会に認知されるような努力は必要と思われる。以前ささやかな試みではあったが、がん疫学研究会の10人の疫学者のご協力を得て、“がんとライフスタイル、がん予防への道”という本を出したことがあった。もっとも残念ながら、販売部数は限られていたが。現在は情報過度の時代であり、情報を整理し正しい情報を提供することが必要である。世界の学者と協力して“Food, Nutrition, and the Prevention of Cancer; A Global Perspective”という本を出したが、これも社会に貢献するためのひとつの試みであった。本研究会が、あるいは会員の方々による多大のご貢献があるが、社会により積極的に働きかけることが望まれる。

個人情報基本法とがんの疫学

がんの研究において、人集団の観察が重要であることはいままでもない。いくら動物実験をやっても、あるいは実験室でメカニズムを研究しても、解明されない問題は多々ある。たとえばリスクの推定などは、人集団の観察なしには得られない。All theory is gray, ever green is the tree of lifeというのは、一面の

真理を示している。世の中の振り子は右に左に動く。今日より個人情報の保護に振り子が動くのは、当然ではあろうが、それが限度を超えれば、社会に非常なマイナスとなって働く。マスコミ関係者が適用除外を求めているのは当然として(もっともよりプライバシーを尊重してもらいたいと思うが)、人集団を対象とし、疾病予防を探る疫学において、適用条件の除外、あるいは緩和を求めるのは当然であろう。実際多くの方々が、あるいは研究会、学会として、その線に沿って努力していらっしゃる。振り子の針は左右に動くものの、良識ある結末に至ることを願うのみである。

がん疫学研究会と関連の研究会

ご記憶の方も多いと思うが、日本疫学会が発足したとき、がん疫学研究会は発展的に解消すべきだといふかなり強い議論があった。つまり非常に忙しいなかで、多くの学会や研究会に付き合いきれない、整理すべきだという考え方である。私は非常に困って、皆さんにおはかりした上で、がん疫学研究会は、講演、シンポジウム、ワークショップを主体としたいわば勉強会とし、一般演題はとらないこととした。現在関連の研究会として、がん予防研究会、がん分子疫学研究会、さらにその他の研究会などがある。その発足には無論必然性があるし、また会員が必ずしもオーバーラップしているわけではない。しかしあるいは会員の方々にとって、負担になっているかもしれない。それで関係の深い研究会は、なるべく時期や場所をそろえて開催して頂ければ、会員の負担が少なくなるのではないかと思う。事実がん疫学研究会とがん予防研究会は、今年もジョイントで開催されるようであるが。米国でも、疫学を専門とする種々の組織があり、それを統合した学会が企画されているようである(例、Congress of Epidemiology 2001、本年6月、トロント)。

以上雑然と考えることを述べた。がん疫学研究会が、若い方々の力により、さらに大きく発展することを願ってやまない。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

がん疫学研究の最近のトピックス —特に、個人情報の保護をめぐる—

愛知県がんセンター研究所 富永 祐民

がん疫学研究の最近のトピックスとしては、研究対象者からの同意の取得、個人情報保護基本法の適用、分子疫学、介入試験などがあげられよう。ここでは同意の取得と個人情報保護基本法の適用を中心に私見を

内講師1、助手2の構成となっており、助手1名が空席となっています。研究および教育面は一応分れていますが、他の行事は一緒に行っており、大講座としての一体感がある様に思います。

教育面では、「社会医学 I」と題された教科の中で、友国教授が衛生学関連の分野、私が公衆衛生学関連の分野を担当しています。講義および実習は、4年次医学生に対して、10~12月にかけて集中して行われ、私も着任後は講義に追われましたが、この原稿を書いている時点ではそれも終り一山越えたといった所です。佐賀医科大学は学生の教育面を重視している点をセールスポイントの一つとしており、チューター制を始めとして、現在はPBL (problem based learning) の導入に向けての準備が進められています。医学生の約半数は女子学生ですが、元気のいい男子学生も多い様に見受けられます。実習の発表会では、液晶プロジェクターを駆使して、アニメーション混じりのアトラクティブな発表を行うグループも多く、そのポテンシャルの高さを感じました。この他、医学部に併設されている4年制の看護学科の講義もかなりのコマ数担当する事になっています。

研究面では、従来から癌の疫学、特に肝癌の疫学的研究を中心に仕事を進めてきました。佐賀県は全国でも最も肝癌が高率な地域の一つです。このため、県の肝疾患対策事業の一部として住民検診に抗 HCV 抗体検査を導入しており、かなりのデータの蓄積があります。この地域特性と私の以前からの経験を生かして、何か良い仕事はできないか、と思いを巡らせています。当面は、実験的手法を用いた症例対照研究 (いわゆる分子疫学的研究) を開始したいと考えております。また、佐賀県では精度の高い地域がん登録が維持されており、Cancer Incidence in Five Continentsに掲載されている数少ない都道府県の一つです。これは先に教室におられた徳留先生、森先生および関係各位の努力によるものです。佐賀県がん登録は県の事業として行われていますが、着任早々県の健康増進課よりがん登録事業への協力の依頼を受け、2001年4月よりお引き受けする事となりました。個人情報保護の動きの中で、がん登録を如何に維持し、また有効なデータを出すか、が私に課せられた課題の一つです。

私の4階の部屋の窓から外を見ると、高い建物が少ない佐賀市が一望のもとに見渡せます。佐賀に赴任するに当たってよく耳にしたのは「佐賀はのんびりしている」という言葉でした。この「のんびり」さとは裏腹に、疫学をめぐる動きはここ1~2年に急転回を見せています。また、国立大学の独立法人化を控えて、佐賀医大も今後どの様な形で運営していくのか、模索中

の段階です。ゆっくりではあっても「今何をなすべきか？」を見失わずに、着実に歩いていきたいと考えています。今後とも暖かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

第24回日本がん疫学研究会の ご案内 (第2報)

岐阜大学医学部公衆衛生学教室 清水弘之

第24回日本がん疫学研究会を下記の要領で開催します。テーマは「日本におけるがんコホート研究」で、がんを主たる対象疾患としたわが国でのコホート研究の意義、重要性、将来性を評価し、その問題点を見つめ、新たな展望を開こうとするものです。

また第8回日本がん予防研究会 (世話人: 田島和雄代表幹事) が同じ場所で前日 (12日) に開催されることになっており、夕方の教育講演「チンパンジーの暮らしと教育 (松沢哲郎教授)」が終了して午後7時から合同懇親会 (参加費、5,000円) を予定しておりますので、合わせて多数のご参加をお待ちしております。

第24回日本がん疫学研究会

日時: 平成13年7月13日 (金)

会場: タワーズプラザホール

(名古屋駅 JR セントラルタワーズ 12F)

参加費: 3,000円 (日本がん予防研究会と共通)

9:00~ 開場

9:30~ 9:35 挨拶

9:35~11:35 合同ワークショップ

「がん予防研究と倫理・個人情報保護」

座長 稲葉 裕 (順天堂大学医学部)

演者: 石川秀樹 (大阪府立成人病センター研究所)

岡本直幸 (神奈川県立がんセンター)

玉腰暁子 (名古屋大学大学院健康社会医学専攻)

浜島信之 (愛知県がんセンター研究所)

11:35~11:40 休憩

11:40~12:30 教育講演

「コホート研究における統計解析上の諸問題」

橋本修二 (東京大学大学院医学系研究科)

12:30~13:30 幹事会 (日本がん疫学研究会)

13:30~14:00 総会 (同)

14:00~14:50 特別報告1

「質問票疫学の十年」

坪野吉孝 (東北大学医学部)

特別報告2

「喫煙者・非喫煙者の肺がんリスク (仮題)」

祖父江友孝 (国立がんセンター研究所)

14:50~15:10 休憩

15:10~17:10 シンポジウム

「日本のがんコホート」

座長 大島 明 (大阪府立成人病センター)

演者: 古野純典 (九州大学医学部)

津金昌一郎 (国立がんセンター研究所支所)

津熊秀明 (大阪府立成人病センター)

永田知里 (岐阜大学医学部)

特別発言者: 高橋真理子 (朝日新聞) (予定)

田中卓二 (金沢医科大学)

中地 敬 (埼玉県がんセンター研究所)

事務局: 〒500-8705 岐阜市司町 40

岐阜大学医学部公衆衛生学教室内

(連絡先 永田知里)

TEL 058-267-2247

★★★★★

第2回日本がん分子疫学研究会の
ご案内 (第2報)東京医科歯科大学分子腫瘍医学 湯浅 保仁
(学術委員長)

第2回日本がん分子疫学研究会学術集会を下記の通り開催いたしますので、御案内申し上げます。

今回のワークショップでは、「遺伝子発現と発がんのリスク・予後および予防」を取り上げました。従来のがん研究では、がん関連遺伝子の変異が主に解析されてきましたが、近年メチル化などによる遺伝子発現の変化もがん化に重要なことが明らかになりました。特に、生活環境要因の改善による発現レベルの是正は、がん予防に有用な可能性が高いと期待されます。5人の指定演者の他に公募も行います。

なお、同会場で3月8、9日に日米のがん協力事業によるシンポジウム(後記)があり、第二日(9日)の午前中がEpidemiologyセッションになっております。日本がん分子疫学研究会は、このシンポジウムに引き続いて行われますので、できるだけ両方にご参加ください。

会期: 平成13年3月9日(金) 午後2時~5時30分

会場: 国立がんセンター内 国際研究交流会館

東京都中央区築地5-1-1

TEL: 03(3542)2511

参加費: 3,000円

下記口座に平成13年2月16日までに振込をお願い致します。

第一勧業銀行 本郷支店 普通

口座番号: 2375186

口座名: 東京医科歯科大学分子腫瘍医学

企画

1. ワークショップ「遺伝子変化と発がんのリスク・予後および予防」

司会 田島和雄(愛知がんセ)、三木義男(癌研)
指定演者(演題名は予定です)津金 昌一郎(国立がんセ・研・支所)
遺伝子発現の疫学研究への応用

高橋 隆(愛知がんセ・研)

肺がんの成因に関する分子疫学的解析

湯浅 保仁(東京医歯大・院・医歯学総合)

胃がん発症と遺伝子発現変化

今井 浩三 (札医大)

遺伝子発現変化と予後

酒井 敏行 (京府医大)

遺伝子発現変化と予防

ワークショップ演題公募(3題のみ口演、他はポスター発表となります)

2. 一般演題 全てポスター発表

3. 研究デザイン(ニューズレターvol.2, No.1, p.1参照) 全てポスター発表

幹事会

懇親会(3月9日午後6時~8時) 会費5,000円

スエヒロ築地本店7階

中央区築地4-1-15, TEL 03(3542)3951

お問い合わせ先: 東京医科歯科大学大学院医歯学総合
研究科分子腫瘍医学

湯浅保仁、中島早苗

TEL: 03-5803-5184 FAX: 03-5803-0125

★★★★★

UNITED STATES - JAPAN COOPERATIVE
CANCER RESEARCH PROGRAM SYMPOSIUM

March 8-9, 2001

International Lecture Hall,
National Cancer Center, Tokyo

March 8 (Thu) 9:00-17:00

9:00-9:10 Introductory Remarks T. Kitagawa

I. Genetic Instability and Cancer

9:10-10:00 M. Sekiguchi (Special Lecture)

Genetic instability and carcinogenesis

10:00-10:25 L. Loeb

Mutator phenotype and cancer

(Coffee break)

10:45-11:10 F. Hanaoka

Xeroderma pigmentosum variant: gene and protein

11:10-11:35 M. Moynahan

Genetic instability and the BRCA genes

11:35-12:00 K. Komatsu

Function of NBS 1 for genetic instability after

irradiation

(Lunch)

13:00-13:25 M. Kanno

Chromatin silencing and tumorigenesis by polycomb group genes

13:25-13:50 Y. Taya

Phosphorylation of Ser46 regulates apoptosis-inducing ability of p53

13:50-14:15 T. Reid

Patterns and mechanism of chromosomal aberrations in cancer cells

14:15-14:40 Y. Ito

Methylation and chromatin assembly in RUNX-related cancer

(Coffee break)

15:00-15:25 S. Gollin

Chromosomal instability in oral cancer cell

15:25-15:50 F. Ishikawa

Molecular mechanisms of chromosome maintenance

15:50-16:15 J. Shay

Cancer therapeutics: the role of telomeres and telomerase in cell cycle checkpoint responses

16:15-17:15 T. Tlsty (Special Lecture)

Genetic instability and cancer treatment

March 9 (Fri) 9:00 - 14:00

II. Factors Associated with Sensitivity to Cancer-related Infection

9:00-9:25 M. Asaka

Factors influencing H. Pylori-induced gastritis and cancer risk

9:25-9:50 J. Parsonnet

H. pylori and cancer: why some and not others?

9:50-10:15 K. Wakabayashi

Dietary factors affecting H. Pylori-associated gastritis in Mongolian gerbils

10:15-10:40 S. Mishiro

Identification of a single nucleotide polymorphism in the MxA gene promoter correlated with the response to hepatitis C patient to interferon

(Coffee break)

11:00-11:25 N. Raab-Traub

The role of Epstein-Barr virus in the development of nasopharyngeal carcinoma

11:25-11:50 C. Rabkin

Cytokine gene polymorphisms in gastric cancer and AIDS-related malignancies

(Lunch)

12:50-13:50 S. O'Brien (Special Lecture)

SDF-1 chemokine gene polymorphism and prognosis of HIV-1 infection

13:50-14:00 Closing Remarks J. Harford

東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西

年末に、どこかでその本の存在を聞いて知っていた「ある末期がん患者のつぶやき」(高地哲夫著)という本を読んだ。私と同年代の麻酔科医が肺がんの転移が判明してから約1年の間に書き記した闘病記である。自分が患者の立場に立ってはじめて感じた、医療者が患者にどのように相対するべきかに関する事柄などが克明に記されている。ごく短い段落ではあったが研究計画、インフォームドコンセントの方法に触れた部分も印象的であった。日頃研究室にばかりいると病気を背負った「人間」を見失いがちであるが、疫学研究における case 1 人 1 人の重みを再確認した次第である。

田島先生には、新世紀初めにふさわしいグローバルな展望をお示しいただいた。がん予防と地球環境問題とは、一見直接の関係はないように見えるけれども、効率追求型の生き様が、地球に対しては垂れ流し公害を生み、人間に対してはストレス、タバコによるイライラ抑制、運動不足など、がんの増加をもたらしているとも言える。ユニークな疫学研究が、このような20世紀の負の遺産の解消に向けて少しでも貢献できるような頑張らねばならない。(竹下 達也)

今年は北陸や山陰でも例年より雪が多いようですが、北海道は気温が低く降雪量も多い年となっています。内陸では-30度を下回ったところがあり、札幌でも-20度まで下がった日がありました。私事で恐縮ですが、7年ほど九州で生活していましたので、その際にご指導いただきました廣畑先生、そして、佐賀医大に赴任された田中先生からのご寄稿を拝読しますと、当時を思い出し、なつかしさがひとしおです。一方で、北海道のこの時期の厳しさが改めて身に凍みます。

厳しい冬を乗り切らなければならない北海道では、特有のライフスタイルがあることも実感します。北国に生活する人々の冬期間における1日当たり歩行数は相当減少することが報じられていますが、住宅周辺の除雪作業(雪はねなどと呼びます)は、かなり高いMETであることも報告されています。また、北海道では冬期間の1人当たり脂肪摂取量が他の季節よりも多い可能性があります、それを示した報告は見当たりません。特有のライフスタイルが北海道民のがん罹患率にどのような影響を及ぼしているかということを明らかにすることも大切であると考えます。(森 満)

発行

日本がん疫学研究会

事務局 〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿1-1

愛知県がんセンター研究所疫学・予防部 気付

TEL: 052-762-6111 (内線 7316) FAX: 052-763-5233

振込口座 00810-2-37001

編集責任者

森 満

竹下達也